いつも待っている

田中澄江

いつも待っている

田中澄江

講談社

いつも待っている

昭和三十七年九月二十日　第一刷発行
三二〇円

著者　田中澄江

発行者　東京都文京区音羽町三ノ一九　野間省一

印刷所　豊国印刷株式会社
（加藤製本）

発行所　東京都文京区音羽町三ノ一九
株式会社　講談社
振替　東京　三九三〇
電話大塚（九四一）大代表三一一一

© 田中澄江　一九六二

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

美智子という名……五
投げられた石……三三
曇のち晴……四二
えらんだ道……六二
春は馬車に乗って……八四
いつも何かが待っている……一〇四
箱根にて……一三三
北へ行く……一四四
学園経営……一六二
男の涙……一八〇
スキャンダル……一九九
いつも待っている……二一九

裝幀　岩崎　鐸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつも待っている

美智子という名

富士美智子はその夜、ゆううつであった。

テレビニュースが、美智子という名の皇太子妃がえらばれたと発表し、その名にふさわしく、美しくかしこそうなひとの映像が画面一ぱいに映し出された。目白の学習院に近い家の茶の間では、夜も十時すぎたというのに、母の節子が声も一きわ高く語りつづけていて、いつ果てるとも知れない。

「すばらしいわ。本当にすばらしいことじゃない？　なんてすばらしいんでしょう、ああすばらしい、何べんいってもすばらしい。つくづくと思えば思うほどすばらしい。」

五十歳にしてはみずみずしく若やいだソプラノで、くりかえしひきかえし、すばらしいの連発である。

「ねえ美智子、あんたどう思う？」返事に困った。頭の中は、明日にせまった就職試験の事で一ぱいであった。

「いえね、いま、お母さんの言ったこと。」

「ああすばらしいってのね。ずい分いろいろな言い方があると思ったわ。」

「何ですって？」
「あなたはすばらしいということについてどうお思いですか？　はい。それは言葉の意味でしょうか。それとも具体的な例をあげるのでございましょうか。」
「親をからかっているんですか。」
「ちがうわ。明日四井物産のひとたちに何を聞かれるかわからないでしょう。だからその練習。」
「ぼやけたことを言わないでちょうだい。明日はきっと聞かれるにちがいないから。ね、あなたの名前は、富士美智子、皇太子妃と同じ。どうお思いですかって。なんて返事するの？」
「はい。下の半分だけ同じでございます。」
「ばかね。それがお茶畑女子大学の学生の言葉ですか。本当にお美しくおかしこそうなお方で、同じ名前を親につけてもらったあたくしも、大へん光栄に存じあげております。言ってごらんなさい。」
小学生ではあるまいし、一々母親の言葉のあとをなぞっていられますか。
いつもならわらいとばしてしまうのだけれど、その夜はそんな元気がなかった。少くとも皇太子妃問題において、母の節子の方が熱が高く、美智子の方が低い。ぶつかっていけば争いになり、争えば負ける。大事な試験の前夜に、相手は親であっても負けるのはいや。何よりも無駄な精力はつかいたくない。このへんで、母のお相手は、そばで新聞を見ている兄の賢一にバトンをゆずろうと考えた。
「ねえお兄さんはすばらしいと思って？」

「何がさ。」
「美智子って方が皇太子妃にえらばれたこと。」
そばから母親が口をそえる。
「すばらしいわよね賢一。これがすばらしくなくて何をすばらしいっていうの？」
賢一はこの春二つ橋大学を出て、日本五大生命の一つ、高田生命につとめている。保険会社づとめとは言っても調査係で、外交専門のような流暢な弁舌は必要とされない。一般のひとよりはいささか弁舌さわやかな母と妹にはさまれて、むしろ大へん無口の方である。
「ねえ、ショッキングよ。本年最大のビッグニュースよ。」
英語まじりにたたみかけられて、
「そりゃあ意外だってことはあるな。何十人か十何人だか知らないが、マスコミが予想していた候補者は全部外れたんだから。」
「それだけですか。」
「まあそれだけですよ。」
「賢一も美智子も、お母さんが昔、四つ葉高等女学校に通ったってことに気づかないの？　世が世なら美智子さまのお母さまと同窓生になれたのよ。しかも同じクラスだったのよ。」
ははあ、そのことが言いたかったのかと美智子は思った。

東京山の手の、高級住宅地にあるその学校は、いま四つ葉学園とよばれ、父兄が比較的、裕福な階層を占めていることで有名だが、カトリックの修道会が経営し、道徳優先の校風に併せ

て、生徒の学力が、公立の有名校に劣らず、都内有数の高さであることも教育界衆知の事実となっている。

まだ五年制の四つ葉高等女学校であった頃、家のあとをつぐ結婚のため、四年で中退しなければならなかった節子は、子供たちはどうしても、一流の学校を卒業させるのだというのが、日頃からの口癖である。

七年前に脳溢血で夫が死んだあと、女手の一つに神楽坂で、戦前から可成り知られた料亭「富士」を経営している。と言っても支配人任せで店には一日一ぺん顔を出すだけ。

震災前は銀座にあったその店は、美智子たちには祖父、節子には父の茂平が、京都から上京し、関西風の割ぽうを看板にしたものである。妻のよし子との間には、節子一人だけ与えられ、震災で銀座の店が焼失してから神楽坂に移った。

節子が十八歳の正月に、長年の無理がたたって心臓を病むと、いつぽっくりいくかわからないからと、学校をやめさせて京都の旅館の次男坊清作を、養子に迎えた。賢一や美智子たちの父である。

茂平も清作も自分から朝早く魚河岸にゆき、板前さんと並んで庖丁を取るような職人気質の男であったが、母の節子は、どちらかと言えば大まかで、労働は金を払って他人に任せ、たとえそのために上る利潤が少くなっても、あんまりばたばたあくせく稼ぎたくない性分である。家の雑用もお手つだい任せ。お茶や謡などのおけいこごとに熱中し、近ごろ「新生の家」とかいう新興宗教の会合に顔を出したりするのが少々変っている以外は、万事おっとりお品のいいことが好き。早いのはまくしたてる舌だけで、空襲で神楽坂の店が焼けた時、目白のいまの住居を買

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い求めたのも、だんだん成長する子供たちを、料亭の雰囲気から遠ざけたいのが望みであった。
「じゃあ僕、お先に。」
立上った賢一につづいて、美智子も自分の部屋に入って明日に備え、新聞の綴じ込みでも読み直そうと立ち上ると、
「おすわりなさい二人とも。」
「何か用があるんですか。」と賢一。
「つまらなそうな顔してるのね。あなた美智子さまのようなお嫁さんが見つからないので、皇太子さんにジェラシイを感じてるのよ、きっと。」
「皇太子と僕に何の関係があるんです？」
「同い年よ。これが第一の関係。皇太子妃と妹が同じ名前、その母親同志が同じ学校。次々と関係があります。」
「へえ、これはおどろいた。」
「何がおどろいたですよ。お母さんは決して幸福な結婚をしなかったけれども、忘れもしません、昭和八年の皇太子御誕生の時、あなたは五ヵ月だった。毎日おなかを撫でさすって、どんなに男の子が生まれるようにと祈ったことでしょう。」
「その頃から新生の家の神さまに入ってたんですか。」
「まぜっかえすんじゃないの。今こそお母さんと対等の口をきいているけれど、その頃はおなかの中で、ただもこもこ動きまわっていただけよ。」
「当り前ですよ。その頃から口をきいてちゃこいつ化けものだ。」賢一と声を合せて思わず美

智子もわらった。母の叱声がとんだ。
「歯ぐきが丸見えですよ。何ですか女のくせに大口あいてわらって。だからお茶畑女子大などに入るのは反対だったのよお母さんは。」

母が美智子によせるそもそもの不満は、娘が、四つ葉と並んで、カトリック修道院が経営し、校風が厳格、父兄に裕福な家庭が多いので有名な清心女子高校を卒業すると、その上の女子大に進まず、国立の中でも、一番勉強家の学生が入ると言われるお茶畑女子大に、勝手に試験を受けて入ってしまった事にあった。その夜も話しはそこまでさかのぼり、
「もしもあのまま清心女子大に入っていたら、皇太子妃殿下の同窓生になれたのよ。」
「それがそんなに、いいことかしら。」
「当り前よ。あなたの縁談の条件がどんなに有利になるかわかりゃしません。」
節子の説によれば、お茶大は国立で費用が安いために貧家の才媛が多く、ろくろくお化粧の仕方も知らず、勉強ばかりしていてなりふりかまわないから、男たちの眼を惹く点で甚だ不利である。特に近ごろは学生運動がさかんで不穏の気がみなぎり、ああいう反抗精神の強い娘たちは、さぞ嫁入りの口がないだろうと言う。
「今夜ほど美智子が、清心女子大へいかなかったってことの悔まれた晩はないことよ、お母さん。」
「では僕の嫁さんは清心出をもらいますか。」
珍らしく賢一が母をよろこばせるようなことを言い出した。その一言が聞きたかったのだと

ばかり浮き浮きとして、
「そうなのよ。あなたからそう言ってくれれば文句ないわよお母さん。じつは清心の先生に存じあげている方があるのよね。早速適当な候補者を見つけていただこうと思って、あなたの承だくがほしかったの。いいことね。わかったわね。じゃあお休みなさい。」
「美智子ももう引きとっていいでしょう。明日の朝は早いんだから。」
賢一の腹は妹のために早くこの場を切りあげてやりたいことだったのだ。しかし節子はあくまでしつこかった。
「お兄さんはもう向うへいっていいことよ。孝二がまた勉強しないで、推理小説を読んでないかどうか見てちょうだい。来年は高校の入学試験なのに、あの子も呑気で困るから。」
賢一だけ去らせると、改まった顔つきになって、
「じつはあなたにふさわしいと思うひとがあるんだけれど。」
「縁談？」
「そうよ。もし話しがまとまれば来年卒業式の前に式をあげたいって方なの。三和貿易のアメリカ支店にゆくときまっていてね、お母様のお母様が四井財閥の四井さんの御本家から出ていらっしゃるし、お父様のお父様が前の農林大臣のお父さまとはとこの御関係になっていて……」
美智子はからだじゅうが素肌に毛のシャツを着たような気もちになった。腹の底からむしゃくしゃして来た。
「縁談どころじゃないわ。これから物知り辞典もひっぱらなくちゃならないのよ。」
「就職より縁談でしょ。」

「何も明日の今夜話さなくてもいいじゃない？」
「美智子さまがあんなにお仕合わせそうに見える晩だから、効果百パアセントなのよ。」
「皇太子妃にえらばれたってことがそんなにお仕合わせかしら。あたくしならいくらたのまれてもおことわりするわ。」
「だれがあなたのようなひとに……第一そんなひとの言うことを何でも反対するようなひと……明日の試験なんて落ちるにきまってます。」
末はしめっぽく湿気をはらんだ母のせりふは、更にとどめを刺すように次の言葉を忘れなかった。
「お母さんは美しくかしこい娘になるようにと思って、美智子という名をつけたのよ。」

そのあくる朝は頭も重く鏡にむかった。同じ美智子という名をつけられても、あの美智子さまと自分とは、大分ちがうと思う。
はれぼったい眼。ざらついた肌。前夜、あまり母の言うことがいやらしくひどく思えて、口惜しく情なく、時計の二時、三時の音まで聞いていた。
なんて虚栄心の強いことだろう。皇太子妃と娘の名が同じだからって何もああまで気負いたつ事はないのだ。何よりも、社会的地位や金のあることが、人生至上の幸福とばかりな言い方がいやだった。料亭のような仕事をしていれば、やっぱりいい客種をつかもうとして、自然にそうした俗世間的な価値で人間を見るようになるのかもしれない。とにかく早く経済的に独立して、あのような母の庇護からはなれたい。思えば大学の四年間、学友の大部分がしているア

ルバイト一つせずに、毎月二万円の小づかいをもらっていたのが悔まれた。二千円でも三千円でも自分でとっていれば、母の娘に対する態度ももっと低姿勢であったかもしれない——。

四井物産は、就職試験の一つの要素に、容姿端麗という条項を加えている。貿易関係で、渉外的な仕事のため、同じ社員として外人に紹介するなら、才色兼備の、日本美人の代表のようなのが欲しいというのも一応の理であろう。美智子が容姿端麗をうたいあげない教職員関係を就職先にえらばなかったのは、自分に自信があったからではない。学校当局から特に推せんされたのである。

成績表のほとんどが優であった。と言って、当人がそれを鼻にかけるような風はみじんもなくて、そそっかしく、よく物忘れしたり、教室でもいねむりをして先生に指名され、とっ拍子もない答えに退くつな授業時間を一ぺんに生き生きとさせる名人である。母の節子はクリーム一つえらぶのにもやかましいが、美智子はせいぜい安ものの化粧水をぬる位、髪もパーマ一つかけない無造作なのが却って美しいという結果になっていた。

東京駅前のビル街の一劃。四井物産の、重厚な調度に装われた一室で、午前九時、美智子は五十人あまりの受験者の一人となっていた。どんな役目のひとたちか知らないが、お茶畑女子大の教授たちよりは大分顔のいろつやも、洋服の生地もよさそうだ。頭も顔もみんなつるつる光っていると言った印象の男たちが、十人あまりずらりと並んだ前にいて、美智子はどうしてもパスしたい。合格したい。それでないと卒業も待たずに結婚させられてしまうかもしれないと、全身を緊張でこわばらせた。

「やあ富士美智子。いい名前ですな。名字も日本一なら美智子も日本一だ。」第一の男が感嘆しきったような声をあげた。一座がわらった。何がいい名前なものか。美智子はわらわなかった。
「美智子という名の皇太子妃殿下が誕生しますな。どんな気持ちです。」
あ、来たなと思ったが、とても母の節子の口真似はできない。
「別にどんな気も致しません。」
「あなたは運動をやっておられますか。」
第二の男が聞いた。
「はい。バスケットに水泳にピンポンを致します。」
「いやその運動ではない。つまり学生運動です。デモったり旗をふったり。」
またわらった。美智子はむかっとした。そんならはじめから学生と頭にちゃんとつければいいのに。それに学生運動はデモったり、旗をふったりだけではない。すぐには返事ができないでいた。
「学校からの推せんには最上級にあなたをほめているんですよ。読んで見ましょうか。思想穏健……学術優等……」
「いやです。お読みにならないで下さい。」
「どうしてですか。」
「ほめられるのがきらいなんです。」
「なるほど。自虐趣味という奴ですかな。」
気どった声を出したのは、変り型の眼鏡をかけた男である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com